

恒之進 江戸へ

平成二十九年三月

恒之進の旅日記は三冊あり江戸往復の記録です。

下写真位置

- ・ 下り(江戸へ向かう)日記など 中央 縦68^ミ 横198^ミ
- ・ 上り(江戸からの戻り)人馬帳 上 縦68^ミ 横198^ミ
- ・ 差出資料(手本、控など) 下 縦68^ミ 横198^ミ

ここでは下り日記(江戸への道中と江戸での生活)を紹介します。

●岩井孫六日記・江戸への道

同時期に恒之進の山北村と隣の王子村(徳善村と合併し現在徳王子村)の岩井孫六も江戸を往復しており、その時の記録が日記として残っていたようです。その翻刻が解説文付で松田智幸著でインターネットに公開されています。出発と江戸到着の箇所を次に紹介します。

◆ 出発

安政三年八月

朔日 六時半(筆者注、以下同様。午後七時)布師田着。宿より外の店屋にて、為持候酒肴にて飲。其内高知、貞次、シジミノ汁一入、咽ヲ潤ス也。

二日 晴 右出足。国見コンニヤク難所ヲ行。七時半時(午後五時)本山着。口・口ニ付野島清五郎杯ノ宿ヨリ口・口夫ヨリ直ニ寝ル。

三日 晴 本山出足、半途口・口雨ニ成候へ共、直ニ止り口・口頃、川御番所着。下番口・口宿ノ亭主へ口・口夜仕替出来来ル。

◆ 江戸到着

安政三年九月

四日 雨 朝六ツ時右出足。程かや(保土ヶ谷)へ参り候所、些草鞋ニ被喰候ニ付、宿駕ニ乗、雨中七ツ時少過、御出入大津屋着致し候所、前月廿五日ノ嵐ニ大傷ニテ、中々止宿等出来不申。夫より品川御屋敷着。然所此

度ノ風ニ、御己屋段々傷ニ相成御修覆中。去共仲間御賦リノ己屋ハ、新規ニ候ニ付堅固ニテ、猪野半平、池源六、野島清五郎、山崎文三郎杯ハ、昨日三日当着ゆへ、御己屋掃除等も世話なしニテ、然ニ洗足致候水サへ不自由。勿論給物連(ととも)ハ一つも無御座候。此夜大津屋ヨリ、一度給候分持来ル。

五日 曇 藤村と相小屋ニ成ル。諸差出相認、扱(さて)朝飯ハ宵ノ残リヲ給候所、菜ノ物無御座、よふよふ宵ノ残リノ香ノ物、一切残リ居候をかじり候テ給仕候。夫ヨリ藤村、田中同伴ニテ、御上屋敷へ届ニ参り、初テ江戸前見物致し、実ニ聞しニまさる広大成事ニテ御座候。届相済藤村ノ類族(義父)桑瀬平市と申人へ、差出様ノ物相頼、右己屋ニテ手酒ヲ馳走逢。肴御国流ノボラノ酢塩梅宜、国を出て初テ時節ノ白酒ヲ飲。内ノ神事ヲ思ヒ出し申候。夫ヨリ少々買物致し帰り、此夜高村ノ己屋へ被招、藤村と一所ニ参り、又飲。自分己屋へ返り寝ル。四ツ時也

●恒之進の日記・江戸への道

岩井孫六日記は毎日几帳面に日記載しています。それに比べ恒之進の日記は素気なく、抜けている日もあり沼津付近で終わっています。山北村出発時の記載(下原文写真)を次に示します。

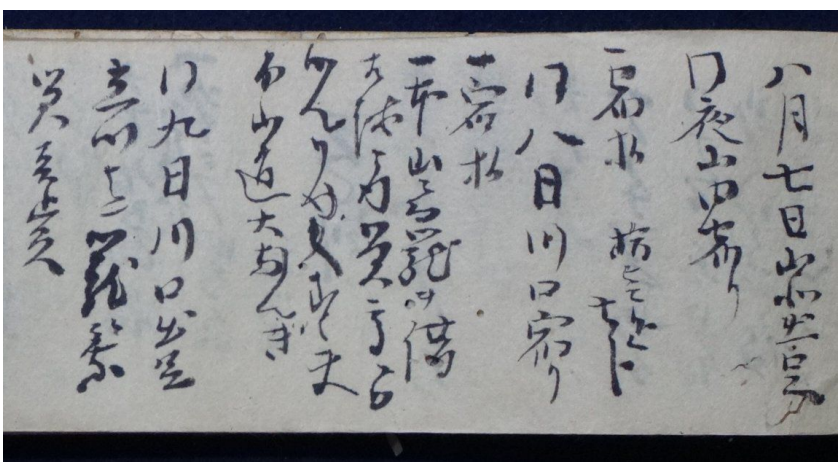
安政三年

八月七日山北ヲ出足

同夜山田宿り

宿払 栃本近七下

同八日川口宿り



宿 弘
 本山ニ而籠ヲ借
 相休ミ内覺高口
 沙(*さ)んりや又少(*す)夫(*ま)
 不山道大なんぎ
 同九日川口出足
 立川迄(*迄) 異体字)籠乗
 留ハ壹歩

●恒之進は追いつかない

恒之進の江戸への道中を日記から拾うと次のようになります。

山北↓山田↓栃本↓川口↓(籠乗)↓立川↓
 (琴平見物無し)丸亀↓明石↓(二ノ谷三ノ谷見物)↓
 楠公墓(下写真の墓の石摺購入カ)↓西宮↓大坂↓草津↓
 桑名↓鳴海↓岡崎↓二タ川(フタカワ)↓権坂浦↓濱松↓
 袋意↓掛川↓大井川↓丸子(マリコ)↓阿部川(安倍川)↓
 浅戸川↓蒲原↓柚の木(*芭蕉の句碑記入あり)↓
 薩タ(唾)峠(廿日)↓沼津↓(以降記載なし)
 *柚の木(芭蕉の句碑)

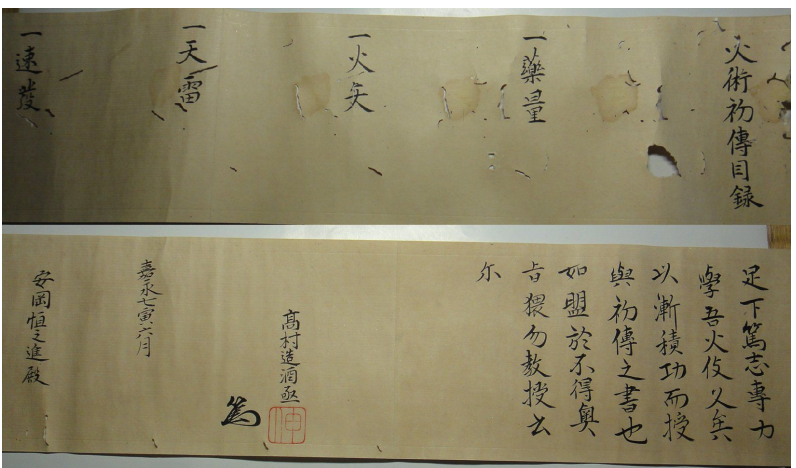
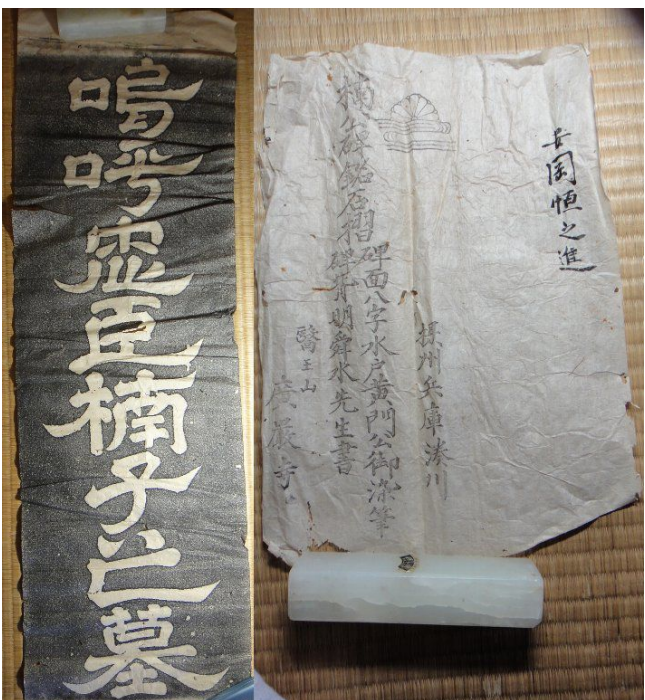
飛(ひ)登(と)尾根者/し久(く)類(る)る/雲可ふしの雪

恒之進の最初の宿は山田(現在の土佐山田)です。岩井は恒之進より七日程早く出発し、最初の宿は布師田です。布師田は参勤などの場合、高智(知)城下を出発して布師田で一泊しますので、岩井は城下まで行きだれかと待ち合わせ出発したようです。以降の両者の日記を読むと、岩井は集団で旅をしています。途中、沼津手前で高村先生(造酒丞)の集団に追いつくとの次の記載があります。

安政三年八月
 同 廿日 晴 朝正六ツ時右出足。沖津川ヲ過、薩田峠ニ致リ、富士ヲ日ノ出少過ニ北受ニ見受、いかにも晴天ノ景色。夫ヨリ壱里計リ新坂、富士見坂とも云ヨリ、海へ掛リヨリ望候へば海面ハ見不申候へ共、前ニ北山遮リ不申、裾ニ掛扱も見事ニ見ユル也。富士川ハ荷物計ノ賃錢ニテ、人渡しニハ錢不入。迫々吉原ニ到リ昼支度致し、原へ程近ク到リ候。松原ニテ、高村先生(造酒丞)、田村七衛門、山崎七平ノ組へ追付、夫ヨリ一所に七ツ時沼津着。松坂屋、源介方、上下八人共着。此夜高村組ノ宿へ被招。尤肴少々其前ニ贈ル。日暮頃ヨリ五ツ時過迄給居、其内婦人ノ三絃参りさわぐ。

*ここで先生と呼ばれる高村造酒丞は嘉永七年寅六月火術初傳目録(下写真)を恒之進に与えています。

岩井と恒之進の出発時の差は七日、瀬戸内の付近で岩井達の荷物を運んでいた船がしげに遭遇し遅れ一日程の差になります。右の行程でも薩タ(唾)峠(廿日) 富士の展望(で有名) ↓沼津が日付が同じ廿日になっています。大坂の屋敷への届、大井川が大雨で川止め、箱根の関所で大名行列と鉢合わせで通過が待たされたりしています。その時に、互いを見付ける機会があったと思うのですが、江戸まで行き会ったとの記載はありません。



●江戸往きの目的

岩井の日記に「・・・松原ニテ・・・追付・・・」とあるので、一つの目的を持った集団に見えます。その目的を松田智幸氏は次のように書いています。

『土佐藩の安政三年における武市半平太、坂本龍馬など多数の藩士や郷土たちの江戸出足が、従来の解釈のような、単なる「剣術修行」にあったのでは決してなく、幕府から土佐藩に命じられた江戸湾警衛のための臨時御用(異国船御手当御用)であったこと、そして、そのために彼らは御用の合間には、寸暇を惜しんで西洋砲術の操練に励んでいたこと、等々の歴史的事実が判明するわけである。なお、安政三年八月十五日の前後に、第十五代藩主山内豊信の御供として随行し、江戸藩邸に詰めた郷土は、これまで不明であったが、本史料によって、次の者たちであったことが明らかになる。

山本安次 山本喜三之進 山崎七平 田村七衛門 田中恵三郎 野島清五郎 秦泉寺永衛 永田友之助
猪野光馬 猪野半平 藤村清八 山崎文三郎 池源六 田中嘉右衛門 大石弥太郎 谷作七 安岡恒之進
中島柳助 安岡覚之助』

藩からの命令で行ったとの判断です。確かに岩井の日記に二ヶ月に一回御扶持米が渡されたとありますので、藩の徒(足軽)として扱われていたようです。坂本龍馬、武市半平太は江戸へ藩から許可を得て安政三年江戸へ行っています。

別に坂本は嘉永六年に江戸に自費留学しています。猪野半平の郷土年譜に自費で長崎に砲術勉強で行ったとの記載があると松田智幸氏が紹介しています。恒之進の伯父文助の日記に息子安岡覚之助も長崎へ行ったとあります。藩から外への勉学の禁を諱したのがその後の文久三年です。文助日記には覚之助は藩の指示で長崎から江戸に向かったとあり、猪野半平の履歴にも同様なことが書かれています。

この安政三年の人々の動きについて手持ちの資料で見ると次のようになります。年月日の下に出典を記載しています。

安政三年一月十一日 山内家公記 馭初式舉行

文助日記 御駆初雨天此時覚之助相勤首尾能相濟

二月 岩井日記猪野 自力修行方奉願御罰届之上長崎表江

三月十一日 山内家公記 豊資公在國湯治賜暇延期を幕府に願出つ

六月十五日 文助日記 覚之助長崎表江出足(原本脇に赤線。後からの書き足しカ)

六月二十七日文助日記 此日覚之助出状来ル

六月 岩井日記猪野 帰着仕四ヶ月長崎に滞在(二月から)

七月十七日 山内家公記 武市半平太に臨時用を以て江戸に出張し公暇剣を學ぶへきを命す

八月朔日 岩井日記 布師田着..... 江戸着九月四日

八月四日 文助日記 曇小雨少ふる此日恒之進婚礼

八月七日 恒之進旅日記 山北ヲ出足同夜山田宿り..... 江戸着九月六日(岩井日記)

八月七日 岩井日記猪野 御臨時御用ヲ以江戸表江被差立之..... 江戸着九月三日(岩井日記)

八月十五日 山内家公記 参勤で高知發駕 九月二日江戸到着

十一月七日 文助日記 本家伊勢宮参 長崎より三浦氏帰覚之助出状来ル

是月 山内家公記 坂本龍馬武術修行として江戸へ赴く

十一月十二日山内家公記 戦法等研究ノ為メ家臣ヲ在長崎蘭人ニ就カシムルノ允(いん)許ヲ幕府ニ請フ

安政四年一月十一日 山内家公記 馭初式舉行

二月四日 文助日記 (覚之助)長崎表出達(江戸へ).....八ヶ月長崎に滞在(安政三年六月十五日から)

閏五月十一日岩井日記 安岡覚之助俄ニ帰国ノ由.....四ヶ月江戸滞在し帰国

六月二日 文助日記

此日覚之助滞宿

...

二十日間で高知に戻る

六月二十六日文助日記

恒之進江戸状来ル

十一月六日 文助日記

恒之進帰宿

これらを見比べてみると、つぎのようなこの違いは何故かあります。

その一 参勤は後発なのに何故先に到着

その二 岩井、恒ノ進、猪野は目的(藩命)同じで別々の出発

その三 山内家公記に坂本の江戸留学(多分私費 武市は公費) 記載あり

猪野、覺之助の留学のについて記載なし

その四 長崎への留学(家臣)について後追いで幕府に認可要請

その五 覺之助の閏五月の江戸から帰国 短期間での帰国

この探求は置いといて恒之進の話題に戻ります。

●恒之進の江戸生活

江戸に入った時、恒之進、岩井などは江戸藩邸ではなく別々の小屋に数人で住んでいたようです。今で云うシエアハウスです。恒之進の記録と一緒に来た人の住居と学んでいる武術などが記載されている箇所があります。それを次に記載します。

野島清五郎

内田弥左衛門

砲術

長足流薩州様□内

■馬術

氣以字

國置平藤

山本勘五郎

下免ノ招重了乙郎屋方

池伊乃乙様□内

上雪地日皆六

大木忠蔵方

辻為右衛門

日屋為山口序

岩井孫六

桃井傳蔵

猪埜光馬

兵學

都治喜慶吉平

砲術

松平能登守様以内

馬術

活坊團場弓様事為

若山莊吉□

山本勘九郎方□□比

坂本大蔵

原様方

池源六

弓術

陰木嘉之進方

長足流■薩州様□内

以来幼少□□

藤村清八

國置平藤方

猪埜半平

兵學

劔術

砲術

松平能登守様以内

桃井傳藤方

下免ノ招重了三郎屋方

若山莊吉 祿

中島柳助

日家惣次郎方

坊因幡守様

砲術

猪埜伊□郎

為坂本大蔵方出席

下免ノ招重斗郎

砲術

秦泉寺永衛

測量和氣際平乃方

桃井傳蔵方

砲術

柳□二男(柳助の二男カ)

田中嘉右衛門

□坊因幡守様以内

中島惣次郎

砲術

坂本大蔵

劔術

桃井傳蔵方

劔術

桃井傳蔵方

日之返武之助□方□

桃井傳蔵方へ出席

山本安次

住後

測量和氣際平乃方

山傳久之助

岩井日記と恒之進日記に記載された人が異なっています。右記赤字は岩井の記録にない人、左記が岩井の記録に

あつて恒之進の記録にない人です。

山崎七平 田中恵三郎
山崎文三郎 永田友之助
山本喜三之進 大石弥太郎
田村七衛門 安岡覚之助
谷作七

恒之進が江戸に住み出した頃の半月間の買物の記録を紹介します。

すし・・・出前？

油さし

たき木代・・・風呂用か

□油代・・・明り

単子代

とふふ代・・・豆腐

炭代・・・七輪

油皿

耳かき・・・今のと同じ？

米代

茶代

季物代・・・着物？

多き木代

火打柴壹ツ・・・火付け用の柴

味噌代

□壹石

ほふき・・・掃除の箒？

三□割

皿壹枚・・・自分のみ？

函代

壹□秦泉寺・・・同居人で三等分

茶□ん

めし代

貳百七拾五文

小皿壹枚

米代

貳百七拾五文 山本

七輪

煙草金口

貳百七拾五文 自分

但次割引・・・買物割引カ

肴代

同宿の三人で買い物費用を割り勘しています。家来が居たようなので自分で料理することはないでしょう。自炊が多かったのは確かのように、またここに記載されているのは食材、燃料など消費材のみです。布団、釜、鍋、茶碗など生活基盤の品がありません。岩井日記に江戸到着直後の様子が書かれています(◆江戸到着の項参照)。到着直後、米を炊き朝食で菜がなく昨晩の香で食べたとあります。小屋に生活基盤が用意されていたように思われま

す。

訓練をどの程度していたのでしょうか。恒之進の日記に次の記載がありました。

毎月六日十六日廿六日 内操鍊

・・・三日

同 二日十二日廿二日 □操鍊□

同四日九日十四日十九日廿四日廿九日 品川乃屋敷二而野戦□ンカ

但十月六日 左初□

・・・九月に江戸に着いて十月六日右の訓練の開始指示か。

この訓練(操鍊)日数は計十一日です。この日以外は自由のようです。

恒之進日記は買物の記録などのみで具体的な生活の様子は不明ですが、岩井は毎日記録しています。その一部を次に紹介します。

安政四己年三月

廿四日 曇 兼約ノ通り、田七・永友・同宿と同伴ニテ、東叡山ヨリ浅草え

ごとごと見物ニ参リ候処、桜花瀧開。うすべり(ゴザ)を敷渡し、瓢平

提重物ニテ男女粧ひ凝し賑ふ有様、画も及がたし。又浅草ハ芝居・軽業・

人形ニテ参詣ノ人は夥し。夫ヨリ飯店ノ辺を見廻り、東橋を渡リ深川・本所

えことと参リ候テ、回迎院ノ辺吉良義央ノ御屋敷ヲ見ル。今商人住ム

也。両国橋を渡リ色々ミセモノ見物スル内刻限移リ、上御屋敷エ立寄り刻

改ヲ受。夜ニ入五ツ頃(午後八時頃)帰り寝ル。

同廿五日 曇 朝髪・月代致し、麻布三軒谷鉄砲ヤシキ与力・蜷川藤五郎へ入

門。九ツ時頃(正午頃)也。夫ヨリ白黒えことと参リ、生人形ニ白井権

八ノ墓へ小紫尋ネ来リ所見事。鏡山お初仕合ヒノ所。夫ヨリ廻テ忠臣蔵夜

討ノ仕組いかにも見事。門外ニハ軽業糸渡リ是亦奇妙。見物中、田恵、同

宿ニ逢一所ニ成リ、蕎麦ニテ香、駕籠ニ乗暮合帰ル。道ヨリ両ニ成ル。

同廿六日 雨 高輪安泰寺ニ書画ノ会有之趣ニテ、山七(山崎七平)・野清(野島清五郎)・山文(山崎文三郎)・秦永(秦泉寺永衛)と赤沼(医師)を誘、雨中乍難義参り、槌分面白ク、七ツ過帰り田村己屋ニテ酒ニ成り、夜半頃迄酔談。困碁ニて帰り寝ル。

同廿七日 晴 廻番当番ニテ門出不為。四ツ頃ヨリ風ニ成り、昼ヨリ晩方へ掛三篇廻り湯ニ参り、夜ニ入候テ、田七迎呑。五ツ過寝ル。此日安恒(安岡恒之進)・山安(山本安次)も日比谷ヨリ(日比谷土佐藩邸)又々品川へ戻ル。

内ヨリ二月廿五日と、三月五日ノ状達ス。

同廿八日 晴 昼頃ヨリ青山ボ方出火申沙汰有之、見物ニ出掛候所、種々相分り不申、終目黒ノ方へ参り巢渡リ見物し、日暮頃帰ル。

同廿九日 晴 先生初出村己屋ニテ咄中、内へノ状相認畢り、直様参り困碁ニ相成。山安・田恵も参り居候テ大勝負。昼過頃ヨリ雨ニ成。晩方少々雷鳴。七ツ過少シ酒ニテ先生ノ塩鯨喰ニ参り候跡へ、市郎平ヨリ酒肴贈来リ候所、間違を以高村小屋ニテ披露。夫ヨリ帰候所、市郎平来リ居。不調子なりニ盃出し酔て帰ル。此日夜須(香美郡夜須村)ノ御足輕五左衛門へ、内へノ状頼ム。

左記の岩井孫六日記からに気になる箇所を紹介します。

・呑酒

酒を飲む日が多いです。酒飲みの土佐人かと思つたが、青木直己著「幕末単身赴任 下級武士の食日記」にも大分飲んだような記載があります。

・上御屋敷エ立寄り刻改ヲ受

「刻改」との用語があり「上御屋敷ニテ刻改を受」「帰り懸上御屋敷ニテ刻改を受帰る」とあります。刻改とは指定された時限に屋敷に行くことと推定します。昭和初期、徴兵を免除されている人に課せられた点呼と呼ぶ勤めの「ある期間ごとに指定された場所に行く」に似ています。

・鉄砲ヤシキ与力・蝮川藤五郎へ入門

藩で決められて操練だけでなく、自から鉄砲の訓練に行っています。

与力の内職でしょうか。

・御足輕五左衛門へ、内へノ状頼ム

足輕五左衛門がどのような理由で国許に戻るか不明ですが、手紙を託しています。

高知までの遠距離の飛脚は高かったか、飛脚利用の記載はみれません。

恒之進の書いた資料にはこのような記載は全くありません。真面目に、面白くなく単身赴任生活を送っていたのでしょうか。

●恒之進と覺之助

恒之進が江戸滞在時に従弟覺之助は長崎から江戸に来ています。日記に覺之助のことが一切出て来ません。家が近所で弓術と一緒に練習した従弟同士が一年振りに出会ったと思うのですが、恒之進の記録には覺之助の名が出てきません。勤めが違い都合が合わなかっただけかもしれません。

岩井日記には覺之助が先に帰国時に関連して次の記載があります。

安政四己年閏五月十一日 晴

安岡覺之助俄ニ帰国ノ由ニテ、当御屋敷へ立寄。

山田も少数デも見送り来リ、山本己屋(安次)ニテ餞別のため酒肴為齎、留守へ状ヲ添守リ誓頼遺ス。八ツ頃出足大森迄見立参リ、帰り掛入湯ニ参リ山本己屋ニて微酔眠。

ここにも恒之進は出てきません。少し気になります。

以上